

第5章 区内の空き地を活用したコミュニティ菜園づくりプロジェクト（仮称） の提案 ありむら潜

平成24年（2012年）9月15日開催の第12回西成特区構想有識者座談会にて、標題のような提案を行ない、若干の議論を行なった。概ね理解されたと考える。提案した内容は以下のとおり。

1. 概要と目的

西成区は孤立しがちな多くの単身高齢者の生きがいづくりやつながりづくりの問題を抱える。生活保護等でアパートを求め、あいりん地域から区全体に広がった結果でもある。一方、大小の空き地・未利用地は西成区内にも少なくない。

この状況を逆手にとって、両者を結びつけ、区内にコミュニティ菜園を広げていく。目的は、単身高齢者の健康・生きがい・つながり・居場所づくりに資することである。

2. 効果

効果は大だと考える。もともと畑づくりにはさまざまな効用と可能性がある。元気な人にも、病気がちな人にも、若者や子供たちにも、それぞれに畑の効用はある。たとえば、仕事づくりにも通じる。菜園療法、菜園福祉という言葉もある。健康づくり・仲間づくりになる。西成区に多い地方出身者にとっては田舎暮らしへの憧憬となって、心を静めてもくれる。緑化でヒートアイランド現象への抑制効果にもなる。ましてや、日雇い労働者時代にスコップやつるはしを手に、土になじんできた高齢の生活保護受給者たちが、畑仕事の曜日を楽しみにし、そこで驚くほど元気になる事例は支援団体も経験している。収穫した野菜の「出口」は、特区構想でできるだろう「屋台村」の食材とするのも夢がある。「都市と農の結合」という大きなテーマも向こうに見えてくる。

3. 経過

この10数年の支援団体による生活保護受給者支援の経験では、畑を求めて、和泉市・大阪狭山市・奈良県・三重県・丹波篠山など、遠くまで遠征しないとなかなかこれをやれなかった。「近くに畑があって手軽にできればもっと参加者が増え、効果があがるのに・・・」と指をくわえていたものである。

釜ヶ崎のまち再生フォーラムでは2009年5月の「定例まちづくりひろば」を『春の野菜収穫祭 兼 プレ・畑サミット』と題して、生活保護の高齢者の方々と共に食や語り合いを楽しんだこともある。“本番の畑サミット”開催の日を夢見てのことだった。他の団体・施設でも同じような体験があると思われる。これらの個別実践を引き継ぎ、合流・発展させるプロジェクトである。

4. 若干の方法論

(1) 土地は畑としての暫定使用でも可であり、必要になればいつでも他用途に廻せる。

(2) 畑に興味はあるが、未経験で参加を躊躇する人も多い。そこで、区内での成功事例（団体）を足場に、区全体に菜園を広げるため、区役所の支援も得て、「西成区コミュニティ菜園普及センター」（仮称）を設立する。

その運営はプロポーザル型の公募によるソーシャル・ビジネスが担う。空き地の確

保・調整などは（区役所も含めて）どこがやるか検討が必要だが、利用者・担当支援団体の募集や調整、集まる高齢者たちをリードする菜園コーディネーターや農業指導員の養成・派遣等を行なう。初めはリーダー養成だけに特化して立ちあげてもよい。そのための一定の人件費補助なども行なう。

5. その他

このプロジェクトの強みは臣永西成区長の存在である。区長はその経歴を生かして、畑用地や肥料の確保のための関係者たちとの交渉にすでに積極的に動いておられる。この強みを生かして、少なくとも向こう2年間にこの提案が着実に前進することを期待する。